

5 駆け足でたどる フラメンコの歴史

フラメンコは18世紀後半に生まれました。それが今、私たちが楽しんでいるフラメンコにどうつながってきているのか、興味はありませんか？駆け足で、フラメンコの歴史をたどってみましょう。

黎明期

18世紀の中頃にはヒターノたちの歌と踊りはすでに有名で、お金持ちの家に招かれたりしていました。また、18世紀に、街はずれの居酒屋などで開かれていた灯火の宴、バイレス・デ・カンディルなどで、それまでグループで踊り歌われていたものが、踊りなしで、一人で歌うようになり、フラメンコの形が生まれてきました。ポロやカーニャ、トナーが初期のレパートリーとして知られています。19世紀中頃

にはフラメンコと言う名前ではばれるようになります。

カフェ・カンタンテ／ 19世紀後半

19世紀中頃、パリにある、ショーを見ることができるカフェを真似てスペインにできたのがカフェ・カンタンテです。タブラオの前身とも言われますが、もともとフラメンコ専門だったわけではありません。当初は寸劇や手品、オペラ歌手の歌唱などともに、出し物の一つでしかなかったフラメンコが、その人気で主役となっていき、1870年代になるとフラメンコ専門のカフェも現れます。最盛期にはスペイン全土で300軒もあったこのカフェを舞台にフラメンコは飛躍的な発展を遂げました。プロとしての意識も芽生え、

歌や踊りの技術が発展し、またマラゲーニャやアレグリアス、ソレアレスなど、今もよく演じられる、代表的なフラメンコのレパートリーも、その大多数はこの時代に確立したのです。またこの頃から劇場の舞台にも上がるようになってきています。

バレエ・フラメンコと オペラ・フラメンカ／ 1910年代～1930年代

1915年、世界初のバレエ・フラメンコ作品が初演されました。それが『恋は魔術師』です。マヌエル・デ・ファリャ作曲の名作は、それまでの即興主体のフラメンコ舞踊とは違い、振り付けが優先する作品でした。1910年代から劇場を主な舞台として活躍する踊り手たちも出てきました。初めて日本で公演したスペイン人アルティスタであるアルヘンティーナらはスペイン国内にとどまらず、パリやニューヨークなど世界を舞台に活躍しました。なお、スペイン語のバレエは日本でいうバレエや舞踊劇をさすほか、舞踊団を意味することもあります。

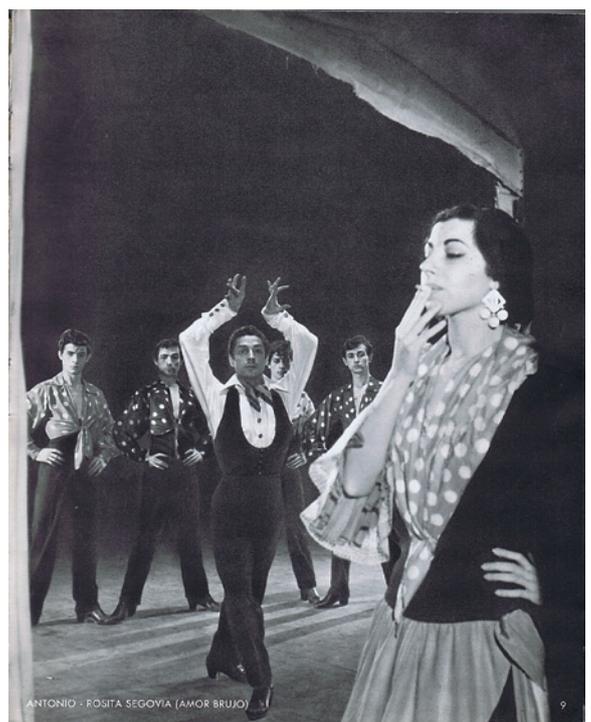
1922年にはグラナダで、カンテ・ホ



トリアーナの宴
19世紀の灯火の宴です。カスターネットを手に踊っています。バイオリンを持っている人もいますね。



カフェ・カンタンテ
ショーを見ながらお酒も飲める社交場。戦前のセビージャを訪れた日本人による紀行文も残っているのをご存知ですか？



恋は魔術師
多くの人取り上げているこの作品、これはグラン・アントニオのバージョン。フラメンコは基本的に個人芸ですが、舞踊団では群舞もあります。



フェスティバル
フェルナンダとベルナルダの姉妹はウトレーラの生まれ。舞踊団やタブラオを経てフェスティバルのスターに。昔の村のフェスティバルは明け方まで続いたものです。

ンドのコンクールが行われました。ファリャや詩人ロルカなどが“アンダルシアの純粋なカンテが失われる”危機を憂いて開催したものでした。当時カンテが実際に危機にあったかどうかという疑問はさておき、これがフラメンコ史上初のコンクールでした。

オペラ・フラメンカと聞くと、フラメンコの歌で綴るオペラ、芝居を想像してしまうのではないのでしょうか？でもこの時代のオペラ・フラメンカは闘牛場などの大きな会場で繰り広げられたフラメンコショーのことです。内容は現在のフラメンコ・フェスティバルに近く、複数の歌手や踊り手が出演するものでした。フラメンコではなく、オペラと名付けることで税金が3%安くなったからだと言います。レコードやラジオの普及で、それまで限られた人しか楽しむことができなかったフラメンコの裾野が広がり、大きな会場での公演の需要ができてきたのです。

バレエ、オペラという、すでに有名で人気があったジャンルに名を借りて、フラメンコはより社会に浸透していきました。1936年に勃発した内戦で、スペインを後にしたサビーカスやカルメン・アマジャらのアメリカでの活躍も、フラメンコをより世界的な芸術へと高めていきました。

フラメンコ学とタブラオ、フェスティバル／1950～1970年代

内戦直後の苦しい生活が落ち着きかけた1950年代には幾つかの新しい動きが起こります。まずはタブラオ。ご存知のように、フラメンコを専門に見せる店のことです。1954年にマドリードに开店した“サンブラ”や“コラル・デ・ラ・モレリア”に続き、観光に力を入れる政策も追い風となってマドリード、セビージャを始め各地に多くの店が開店しました。

1955年に『フラメンコ学』をタイトルとした本が出版され、フラメンコ学、フラメンコ研究が注目されます。実際にはこれ以前にもフラメンコをテーマとした本はありましたが、この言葉によって、研究に弾みがついたというのはあるでしょう。1958年にはヘレスのフラメンコ学会が誕生しています。

また、1957年にウトレーラで始まったポタヘ・ヒターノを皮切りに、アンダルシア各地で夏のフェスティバルが開催されるようになります。この時代の代表的なアルティスタには歌手アントニオ・マイレーナがいます。



21世紀
前衛的と言われるイスラエル・ガルバンですがその発想の源は歴史にあります。古い写真のポーズをたくさん取り入れているのはよく知られるところです。 ©Jean-Louis Duzert Festival Nimes

混交の時代／1975年以降

1975年に独裁政治を行っていたフランコ将軍が亡くなり、スペインに新しい時代が訪れます。ロックやジャズなど他ジャンルとの交流も進み、カホンなどそれまでフラメンコには使われてこなかった楽器もポピュラーになっていきます。1978年にはスペイン国立バレエ団が誕生しますが、大きなスペイン舞踊団の演目でも、スペイン舞踊よりもフラメンコの比重が増えてきます。1980年にはセビージャでビエナナルが始まります。長期間にわたって行われる大規模フェスティバルは、その歩みと共に、アルティスタによる作品制作を推進してきました。また大学でもフラメンコ研究が進むようになりました。

そして今、21世紀のフラメンコでは、世界を舞台に、多くの才能あるアルティスタたちによって意欲的な作品が多く生み出されているのです。



90のしかぜ
来日公演通訳2回目は今年再結成したグループ、ケタマとアントニオ・カナーレスらでした。まだ慣れてなくてプレッシャーでハゲができました。

志風恭子／1987年よりスペイン在住。セビージャ大学フラメンコ学博士課程前期終了。パセオ通信員、通訳コーディネーターとして活躍。パコ・デルシアをはじめ、多くのフラメンコ公演に携わる。